

明日 への 話題

バブル経済と 低溫経済の間



日興リサーチセンター
理事長

やまぐち ひろひで
山口 廣秀

日本経済は、まだまだ活力を取り戻していない。低溫経済と言ってよい。潜在成長率は年率0%台だ。アニマルスピリットにあふれる企業は少ないし、ベンチャーに打って出ようとする若者も多くない。仔細にみれば、AIなどのハイテク分野に活路を見出そうとする企業は出てきているし、大胆に起業する若者もみられるようになってはいる。しかし、それらが日本経済を牽引するほどの力はまだない。

このところ資産市場を巡っては、明るい話題が少なくない。日経平均は、2月22日に34年振りに38,915円の既往最高値を更新し、その10日後には4万円を超えた。DX・GX時代の中でハイテクや半導体関連の企業がリードしている。マンション価格も東京都心の物件を中心に高騰が続いている。値段が高ければ高いほど飛ぶように売られているらしい。高層のオフィスビルも来年に向けて建設ラッシュと言ってよい状況だ。このままいけば都心の風景は遠くないうちに一変する。ゴルフ場の会員権は値上がりをはじめている。現代アートなど的高级絵画も高値取引が少なくないと言われている。低溫経済の下でミニバブルが生まれているようだ。ちょうど外を見るとソメイヨシノが満開を迎えており、たまたま笠信太郎氏の「花見酒の経済」を思い出した。笠氏は、様々な行き過ぎがみられた60年前の日本経済を、「花見酒の経済」と言ったが、今まさにそういうことなのかもしれない。いつまで続くか分からないように思う。

一方、日本経済は物価が上がり金利が動く世界に移りつつある。この30年経験しなかった世界だ。いよいよ優勝劣敗が作動する。人手不足は、企業には効率経営を求め、働き手にはチャンスを与える。日本が活力を取り戻し、新陳代謝が動く健全な経済、言い換えれば低溫経済を脱し適溫経済に向かう千載一遇の好機だ。

もちろん、バブル経済となっては元も子もない。しかし、適溫経済とバブル経済は紙一重だ。財政の大盤振る舞いと金融の大規模緩和が続けば、いつでも適溫がバブルに変わる。折角掴みつつある適溫経済への途を着実に歩んでいくには、財政支援と金融緩和に慣れ切った甘えの構造から脱皮していかなければならない。脱皮しなければ、低溫経済に逆戻りするか、花見酒の経済から本格的なバブル経済に向かうか、のいずれかである。

日本が適溫経済にしっかりと着地していくには、超えなければならないハードルは依然高い。